

Title	テクノロジーインテリジェンスから見たイノベーション(<ホットイシュー> イノベーションを実現するためのマネジメント (8))
Author(s)	菅澤, 喜男
Citation	年次学術大会講演要旨集, 21: 884-885
Issue Date	2006-10-21
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/6425
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般論文

○菅澤喜男（日大グローバル・ビジネス研）

はじめに

情報化時代と言われて久しいが、コンピュータ・ハードウェアの性能が飛躍的に向上し、その利用者の増大と共に利用するための知識も高度化したものとする。しかし、集められた情報を上手に利用する知識が、十分に醸成されたかは甚だ疑問である。

インテリジェンスとは、役に立つ情報を収集し利用する能力である。その背景には、単に情報を集めれば何か良いことがあると言うものではない。企業で言えば、集められた情報を元に具体的克正確な意思決定ができたかどうか重要である。つまり、インテリジェンスとは、アクションブル・インフォメーションと言える。知識とインテリジェンスの間には、非常にあいまいな違いのみが存在する。ある者はインテリジェンスを知識の同義語として理解しており、他は、インテリジェンスを情報と知識の間にある何かであるとして理解している者もいる。あるいは「分析された情報」として議論し、インテリジェンスは、信頼性と意味が確定された情報であると言明できる。さらに、行動関係を強調し、「インテリジェンスは、意思決定が可能な限界まで分析された情報」としての理解もできる。本発表では、テクノロジーインテリジェンスの概念を紹介し、イノベーションとの関係に言及するものである。

1. インテリジェンスに関する研究動向

インテリジェンスに関する研究は、ビジネスインテリジェンス (Business Intelligence) として認知されて。その概念は 1970 年代初めにスウェーデン・Lund 大学の Dr. Stevan Dedijer 博士が唱え、Lund 大学で講義に取り入れたのが始まりである。同博士は、特に情報のセキュリティを重視することを強調した。一方、社会的インテリジェンス (Social Intelligence) の概念も導入し、情報化社会に備え、社会での情報の活用法を研究すべきことを強調した。博士は米国を中心に力点が置かれておる競争相手の情報を入手し、企業の競争優位をめざす、いわゆる “競争情報” (Competitive Intelligence) の研究に情報研究が偏ることに批判的であったと言われている。冷戦終了間近かの 1986 年になると、米国では CIA 関係者を中心に “Society of Competitive Intelligence Professionals-競争情報専門家協会” が設立され、CIA など諜報関係機関の競争相手国の情報の収集、分析法をビジネスに応用する動きが現れた。1990 年代になると英国、フランス、スウェーデン、ベルギー、イスラエル、日本、オーストラリア、中国などでも競合情報、ビジネスインテリジェンスの研究が始まった。特に、欧米では冷戦時代の米国 CIA、英国 MI6、イスラエルの MOSAD など軍の諜報機関の競争相手国、仮想敵国に対する情報収集、分析、評価、活用の手法を企業の競争優位に活用しようという考えが台頭してきた。教育面では、欧米の大学では約 50 の大学が競争情報の教育を始め、学部、大学院で競争情報専門学位を付与している現状がある。日本はインテリジェンス教育・研究の後進

国と言わざる得ない状況である。

2. テクノロジーインテリジェンス領域とイノベーション

“テクノロジーインテリジェンス”という用語がどのように使用されるかを明確にし、使用の側面と基本となるコンセプトを説明する。

① テクノロジーモニタリング：特定なあるいは不特定な、関連情報を得るための技術

環境の観察結果を取り扱う。このことは、初期段階での変化の兆候を特定し、適切な現象の情報を収集し、かつ進歩の速度を見極める同時に、変化により起こるであろう影響の性質や形を解明することを含む。よって、テクノロジーモニタリングは、潜在的な変化のアラームシステムのように動作する。②テクノロジーフォーキャスティング：シグナルやイベントの観察範囲を超え、シグナルやイベントを、ビジネス戦略に照らし合わせての評価を行う。これらの方法論の一般的な批評は、ほとんどの成果物がデータ生成をもとにした数学的モデルであり、戦略関連のインテリジェンスではないということである。③テクノロジー・スカウティング：将来開発のために、科学や技術における新しいアイデアを探索することに取り組む。テクノロジーモニタリングやテクノロジーフォーキャスティングとは違い、テクノロジー・スカウティングは、ユーザのリクエストを受け、特定の技術、専門あるいは組織の対象となる情報を収集し選別することである。④コンペティティブ・テクニカル・インテリジェンス(CTI)：情報収集と分析のプロセスと結果両方を含む、訓練に基づいたアプローチである。よって、異なった CTI の定義が同じ著者の中でも使用されることがある。また、企業の外で発生している科学や技術開発やトレンドにおいて、存在する最良の情報を、収集、分析やコミュニケーションを行うことである。また、科学あるいは技術脅威、機会、あるいは開発が、企業の競争状態に潜在的に影響を与える、ビジネス感性に関する情報であると言える。

おわりに

インテリジェンスに関する境域・研究は、世界的動向を概観すれば極めて盛んであると言える。情報化時代に遅れたインテリジェンス研究を積極的に取り込み、プロダクト志向の強いイノベーションを引き起こすためにも、教育機関での実践的なカリキュラムが組まれることが重要であると考ええる。

参考文献

- 1] “Technology Intelligence –Concept Design and Implementation in Technology based SMEs” Pascal SAVIOZ, Palgrave Macmillan(2004)
- 2] “Strategic and Competitive Analysis –Methods and techniques for Analyzing Business Competition” Craig S. Fleisher & Babette E. Bensoussan, Prentice Hall(2002) 日本語翻訳「戦略と競争分析」菅澤、岡村、藤澤、コロナ社 (2005 年)
- 3] “Proven Strategies in Competitive Intelligence- Lesson from the Trenches” Edited John E. Prescott and Stephen H. Miler, Society of Competitive Intelligence Professionals(2001)